

## 四国へんろ展 調査最前線

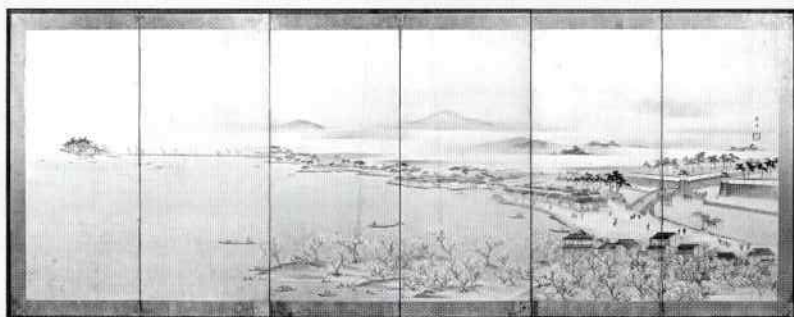


愛媛県美術館では、今年秋開催の四国霊場開創1200年記念の展覧会に向けて、展示作品の調査を進めております。松山市に所在する四国霊場第52番札所の太山寺様のご厚意により、愛媛大学日本史研究室と共同で、昨年6月から太山寺に収蔵されている文化財の調査を行いました。文書1万点、書画類300点、工芸品100点あまりを数えました。もっとも古いものでは、奈良時代の経典《隅寺心経》が見つかりました。平安時代の仏像《五智如来坐像》や女神像、中世や近世の仏画、太山寺と松山藩とのかわりをする文書、砥部焼にとって重要な作品となる大花瓶など、これまでに知られていなかった、貴重な文化財の数々がわかってきました。こうした最新の調査研究の成果をまじえて、9月6日から愛媛県美術館の展覧会で公開いたしますので、ご期待ください。(石岡)



### 愛媛県美術館コレクション紹介

#### 三好応岸 《宇和島・江戸図屏風》 (右隻)



三好応岸の名は、今日、愛媛県内でもほとんど知られていないかもしれませんが、しかし幕末から明治期にかけて宇和島で活躍した重要な画家として再評価されるべき人物です。

応岸は天保3年(1832)、宇和島本町で代々町頭取、紺屋頭取を勤めた三好家に次男として生まれました。通称は又八郎。江戸時代の富裕な商家の常として彼の父の三郎兵衛(1792-1849)は書画を好み、京風の絵を学んで応山と号し、画家としても活躍した人物でしたから、又八郎も幼少から絵を好み、父に師事しました。数え年18歳で父と死別しましたが、次男だったことから家業を継ぐ必要もなく、独立して画家となり、応岸と号しました。宇和島藩第九代藩主、伊達宗徳の知遇を得て度々画御用をつとめたそうです。明治15年(1882)、東京で開催された農商務省主催の絵画展覧会である第1回内国絵画共進会に《幽霊》、《夜ノ浪》を出品し、明治17年の第2回内国絵画共進会には《狼》、《山水》を出品しましたから、その画技は高く評価されていたと判ります。亡くなったのは明治42年(1909)のことでした。

当館には応岸の絵も父の応山の絵も収蔵されていませんでしたが、この度ようやく応岸の絵を1点、収蔵することができました。それがここに紹介する《宇和島・江戸図屏風》です。

小振りな六曲一双の屏風に海辺の城下町2ヶ所の春景を対比しています。左隻は江戸東京の品川から築地、永代橋、深川木場、行徳塩田

を望んでいます。彼方には富士山が見えますが、現実に富士山の見える方角とは少し違っているようです。海上には小さな船が浮かび、船上の旅行者や芸民の姿が都市の賑わいを感じさせます。

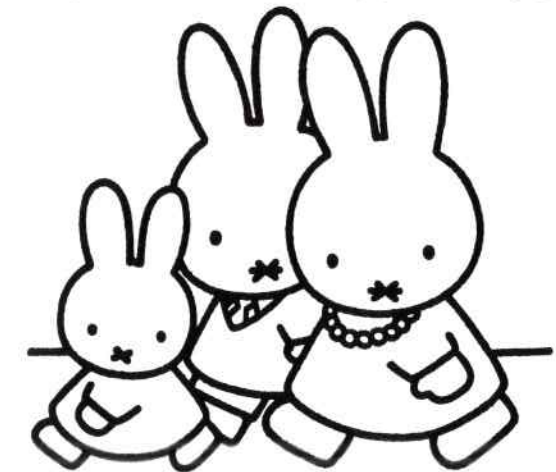
右隻は宇和島城を南から見ています。堀に架かる豊後橋の先に搦手門がありますが、これは現存しません。画面の左端には住吉神社が見えますが、これは現在の住吉公園にあたります。この一帯では江戸時代から近代までの間に大規模な埋め立てが行われたので、現在の地形は昔の地形とは異なっています。この絵に見える地形は、ことによると元禄時代の地形を想像して描いたものであるのかもしれませんが。

この絵の制作年は明らかではありませんが、落款の書風は明治32年(1899)に山神王神社(鬼北町)に奉納された応岸筆の絵馬(石橋山大合戦図)の落款に近いように見えますから、同じく明治期の作と考えられます。明治期の古写真を見ると、殿様の居城という本来の役割を失った宇和島城が無残に荒れ果てていた様子を知ることができます。それこそが応岸の眼前にあった現実の景色だったはずですが、応岸が描きだしたのは、美しく維持管理された城と賑やかな城下町の姿です。昔日の宇和島城を懐古し、元禄時代の栄華にまで想いを馳せながら、江戸城下の風景にも匹敵する輝かしい景観として賛美することが、応岸の(というよりは応岸にこの絵を描かせた注文主の)意図ではなかったかと推察されます。(梶岡)



## 美術館に 行こう!

ディック・ブルーナに学ぶ  
モダン・アートの楽しみ方



## 2014年 7月5日(土) - 9月7日(日)

「びじゅつかんへいこうとおもうの。いっしょにいきたいひといる？」お母さんがこう声をかける場面からはじまるディック・ブルーナの絵本「うさこちゃん びじゅつかんへいく」(1997年)はミッフィー(うさこちゃん)が、家族と一緒に初めて美術館へ行くお話です。

本展覧会はこのミッフィーと同じく「美術館に行くのは初めて」という幼稚園や小学校低学年の子どもたちとその保護者の方を中心に企画しました。

展覧会ではまず、ミッフィーのお話に添いながら、愛媛県美術館のモダン・アート(近現代美術)のコレクションを楽しむ、第1章「みてみよう」がみなさんをお出迎えます。次に、第2章「考えてみよう」として、オランダの絵本作家であり、グラフィックデザイナーである、ディック・ブルーナの絵本づくりやデザインの仕事を紹介します。そして最後に、ブルーナの絵本作りの一端を体験できる、第3章「作ってみよう」(「いろがみワーク」やミッフィーの耳型を作るコーナー等があります)の、3つのテーマにより、美術館を楽しんで頂きます。

どうぞこの夏、ご家族やお友達と一緒に美術館に足を運んでいただき、アート作品をじっくりみて、話して、考えて、聴いて、美術館を楽しんでいただければ幸いです。

「なつやすみ かぞくといっしょに びじゅつかん」(鈴木)

Illustrations Dick Bruna © copyright Mercis bv.1953-2014 www.miffy.com

## 四国へんろ展 9月6日(土)~10月13日(月・祝)

弘法大師空海が、四国霊場を開創したと伝えられる弘仁6年(815)から数え、今年はちょうど1200年目という大きな節目に当たります。それを記念して、四国4県の県立博物館・美術館では、四国へんろに関する大規模な展覧会を共同で開催します。

4県で同一テーマの下に展覧会を開催するのは、1999~2000年の「国宝弘法大師空海展」以来15年ぶりのことですが、この時は各県ともほぼ共通の資料が出品されるいわゆる「巡回展」の形式をとっていました。しかし今回は、各県で独自の構成をとる、言うなれば「自主企画展」×4本立てと言った趣き。当然、出品資料は各会場異なりますし、展示構成も各県のオリジナル。地元の各札所や金剛峯寺など関連の寺院等の文化財をはじめ、これまで各県で進められてきた調査の成果も反映し、かつてない視野で総合的に「四国へんろ」という文化を捉えます。まさしく「お遍路する」ように各会場を巡っていただければ幸いです。

愛媛会場では、国宝4件、重要文化財14件を含む約100件を紹介いたします。札所の文化財としては、第42番佛木寺の《弘法大師坐像》(愛媛県指定文化財、鎌倉時代)が32年ぶりに寺外公開されるほか、第49番浄土寺の《空也上人立像》(重文、鎌倉時代)、第52番太山寺の《十一面観音立像》(重文、平安時代)などが出陣されます。さらに伊予出身の名僧一遍が、第45番若屋寺で修行する場面を描いた《一遍聖絵》(国宝、鎌倉時代、神奈川・清浄光寺 ※9/30~10/13展示)など、愛媛会場では展示されない作品も多数。どうぞお見逃しなく!!(長井)

### イベント情報

- ◆オープニングイベント 記念講演会  
「巡礼-その深き御心に導かれしもの」  
+能管と琵琶の演奏会  
◆日 時:9/6(土)  
①11:00~12:30 ②13:30~15:00  
◆講 師: 添田隆昭氏(高野山真言宗宗務総長)
- ◆講演会  
I「絵で見る弘法大師伝  
-長楽寺藏《弘法大師行状巻茶羅》  
を中心に-」  
◆日 時:9/13(土)13:30~15:00  
◆講 師: 堀出貴美子氏(奈良大学教授)
- II「近所の仏教  
-生活の中にある智慧-」  
◆日 時:9/20(土)14:00~15:00  
◆講 師: 白川密成氏(第57番札所崇福寺住持)
- III「四国霊場開創1200年と世界遺産への道  
-空海と弘法大師の足跡-」  
◆日 時:9/21(日)13:30~15:00  
◆講 師: 胡 光氏(愛媛大学准教授)

Canforo(カンフォロ)とは?  
イタリア語で「くすのき」を意味します。  
愛媛県美術館の中庭に立つ3本の大きな  
くすのきにちなんでなづけられました。



ウマの  
ひとこと  
(編集後記)

今年度の企画展は、「柳瀬正季」展に始まり、「遊亀と教彦」展まで、近代洋画、工芸、現代美術、仏教美術、写真、近代日本画などの展覧会を6本開催します。所蔵品もさまざまなテーマで愛媛県美術館のコレクションを中心に特集いたしますのでぜひお越しください。今号から愛媛県美術館のコレクションを紹介するコーナーを設けました。お楽しみください。(石岡)

愛媛県美術館  
〒790-0007 愛媛県松山市堀之内  
TEL 089-932-0010 FAX 089-932-0511  
http://www.ehime-art.jp







つぶやき

当館所蔵品のモネ(アンティープ峠)を「新印象派 光と色のドラマ」展(大阪・あべのハルカス美術館:10/10-H27/1/12、東京都美術館:1/24-3/29)に出展します。お近くにお出かけの際は是非ご覧ください。(武田)

学芸レポート

### 「平成25年度新収蔵品展」より

昨年(平成25年)度、寄贈や購入により、当館には新たに37件の作品がコレクションに加りました。地方の公立美術館の活動において、最も重視すべきなのは、地元ゆかりの作家・作品を柱として収集し、調査研究・評価していくことです。今回の新収蔵品たちも、これまでのコレクションにさらに厚みと広がりを与える作品ばかりです。これらは現在8月24日まで開催中の「平成25年度新収蔵品展」にてお披露目しています。

古くは、幕末から近代にかけて活動した宇和島出身の二人の日本画家・三好岸と伊藤深水の完成度の高い新出作品にはじまり、松山市出身で近代日本のグラフィックデザインの第一人者として評価される杉浦非水、今治市出身で自由奔放で明朗な画風で知られる洋画家・野間仁根、砥部町出身で現在フィンランドのアプリケーションブランド「マリメッコ」のデザイナーとして活躍する石本藤雄など、いずれも郷土ゆかりの重要作家のバラエティに富んだ内容となっています。これらのニューカマーたち、今後それぞれに調査研究や定期的な展示公開を重ねていくことで、当館の重要な「顔」の一つ一つとなっていくことでしょう。(長井)



石本藤雄の作品たち



三好岸(宇和島・江戸密群鳥)と伊藤深水(平敷盛後)

### 「柳瀬正夢1900-1945 時代を生き、ひたむきな熱情」開催報告

大正、昭和という激動の時代を駆けぬけたアーティスト・柳瀬正夢。少年時代を過ごしその才能を開花させた北九州(北九州市立美術館)、活躍の舞台となった関東(神奈川県立近代美術館 葉山)、そして生誕地の松山(当館)という、柳瀬のゆかりの3つの土地の美術館を巡回した本展覧会は、多方面にわたり活躍した柳瀬の画業を紹介するもので、当館が巡回の最終会場となりました。展覧会では、絵画だけでなく、諷刺画、グラフィックデザイン、漫画、演劇、絵本、俳句、写真等、ジャンルや様式を越境しながらめまぐるしく活躍した柳瀬の仕事の全貌を約650点の作品資料でたどりましました。また、会期中には、記念講演会や松山市内の柳瀬ゆかりの土地をたどるフィールドワーク等の関連イベントも実施しました。

当館では約14年ぶりの大規模な回顧展となった本展覧会は、今なお光彩を放つ、柳瀬正夢のあふれんばかりの才能を知っていただく機会となったのではないかと思います。かく言う筆者も、展覧会の準備を進めることに柳瀬の魅力の虜になった一人です。当館では柳瀬の作品を多く収蔵しています。本展での成果を踏まえながら、今後も調査研究と展示での紹介を続けていきたいと思っています。(鶴原)



### 普及レポート

5月6日・17日に、柳瀬正夢展関連イベント・一日講座「初めての油絵」を実施しました。この講座は、柳瀬正夢の作品数点を鑑賞しながら油絵の表現方法を学んだ後、当館アトリエで実際に作品を制作するというものです。アトリエで最初にするのはイーゼルを立てること。目の前の花や果物をどのように描くかイメージしながらの場所探し、制作への期待を高めます。そして、大まかな配色を考えながらの下塗りの後、筆やペインティングナイフを使いながら、画面に絵の具をおく感覚で仕上げていきました。筆先を使った繊細なタッチ、ナイフを使った大胆なスクラッチ等、自分の心地よい表現方法を探っていきます。今回、短時間での制作でしたが、みるみるうちに絵の中に豊かな色彩が生まれ、参加者の皆さんの個性あふれる作品が次々と完成しました。お似合いの額をつけて、今度は鑑賞する楽しみを味わってほしいと思います。(野口)

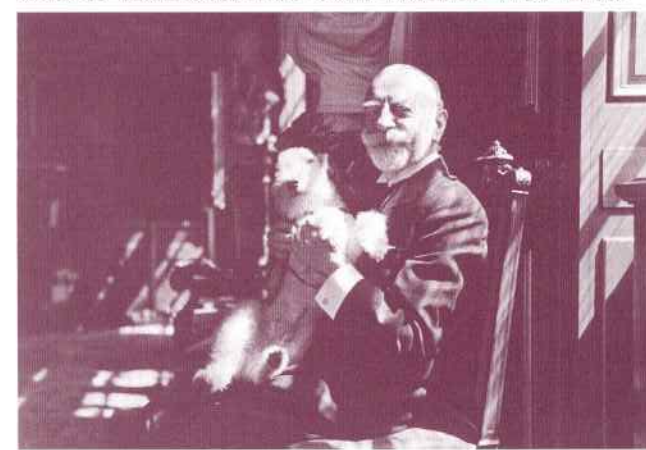


東京富士美術館所蔵写真展

## ロバート・キャパと 過ごす時間/ 光の風景へ

10月25日(土) - 12月1日(月)

[光の風景へ]で一部展示替えがあります。(前期:10/25(土)-11/9(日)、後期:11/11(火)-12/1(月))



ロバート・キャパ(アドルフ・マックス(ブリュッセル市長)ブリュッセル、ベルギー)1939年 Robert Capa © International Center of Photography /Magnum Photos 各 東京富士美術館蔵



ハリー・エリス (照明に浮かぶ万国博覧会とエッフェル塔) 1900年

白い豊かな髭をたくわえ、犬を嬉しそうに抱えてこちらを見つめる人物—アドルフ・マックス(1869-1939)は市民からの大いなる信頼のもと、ベルギーのブリュッセル市長としてほぼ30年間執務に当たった人物です。愛犬のワイアーヘアード・フォックス・テリアのハッピーとともに、寛いだ様子をみせています。かつて第一次世界大戦でブリュッセルがドイツに占領された時に、軍事協力を拒否したために投獄され、脱出して戻った際には市民から英雄として迎えられました。

撮影したのはロバート・キャパ(1913-1954)。1939年の春、撮影当時は既にスペイン市民戦争での報道写真家としての仕事で世界中にその名を知られていました。キャパは、気さくな人柄やユーモアのある会話で、出会う人々を瞬時にリラックスさせる才能を持っていました。この作品も、手前でカメラを構えるキャパの存在を感じさせる一枚となっています。

本展では、キャパの生誕100年を経て、戦争を中心に取材しながらも常に人間に温かい視線を向けてきたその作品をたどります。また、キャパと親しかった、デビッド・シーモア、ゲルダ・タロー、アンリ・カルティエ=ブレッソン、アンドレ・ケルテスを始めとする、キャパの周辺で活躍した写真家たちの作品も合わせてお楽しみください。

また同時企画として、ヨーロッパとアメリカを中心とするキャパが訪れた地域の、19世紀後半から20世紀中頃の風景写真をご紹介します。(杉山)

## 生誕190年 天野方壺



天野方壺(蓮池図)

### 所蔵品展 5月27日(火) - 8月24日(日)

江戸時代後期の松山藩の三津浜に生まれて、全国を旅しながら画道を修業し、明治前期の京都を拠点に活躍した画家、天野方壺。

有名な富岡鉄斎からも「画匠」と評価された彼の生没年は永らく不確かでしたが、近年、子孫の方から画家の自筆の履歴書が提供されたのをはじめ、重要な資料が出てきたことから、文政7年(1824)に生まれて明治28年(1895)に亡くなったことが確定しました。というわけで今年は生誕190年にあたります。それを記念して、当館の所蔵品と寄託品から計19点をご紹介します。

方壺の絵には漢詩文が書き添えられている場合があります。今回ご紹介する作品では全作品がそうになっています。詩経のような古典や、唐、宋、元、明等の文人たちの書物から、意に沿う詩文を引用して記しています。ですから、絵にこめた方壺自身の思いと詩文の意味は重なり合っているはず。詩文を記している書体も様々で、書にも巧みだったことが窺えます。絵と書と詩文の響き合いが見どころになっていると言えますが、もちろん絵だけを観ていただいても、充分にお楽しみいただけます。筆墨の勢いによる作品もあれば、大胆なデザイン感覚による作品もあり、緻密に描き込まれた作品もあります。様々な画風を使い分ける技は、確かに「画匠」と呼ばれるにふさわしいものです。方壺の書画の妙技と雅趣、その多彩な幅の広さをご鑑賞いただければ幸いです。(梶岡)

### INFORMATION

#### 企画展案内

安田靉彦生誕130年、小倉遊亀生誕120年 「遊亀と靉彦」展 師からのたまもの・受け継がれた美 12/13(土)~1/25(日) 安田靉彦と小倉遊亀それぞれの代表作を、二人をつないだ伊予出身の歴史家、水木要太郎の資料とともに取り上げ、近代日本画史における師承の一つの姿を探ります。

#### イベント案内

開館記念日事業 11月23日(日) 開館記念日を祝い、多くの県民の皆様へ美術館にご来館いただき、美術に親しんでいただける一日として、所蔵品展観覧料の無料のほか、各種イベントを計画しています。どうぞご期待。

#### ご利用案内

- 開館時間 9:40~18:00 (入室は17:30まで) ※企画展及び貸展については、入室時間が異なる場合があります。各展覧会のページでお確かめください。
- 休館日 月曜日 (祝日、振替休日及び第1月曜日に当たる場合は閉館し、その翌日が休館日)



気がつけばビーボ(高所作業車のこと)の運転も手慣れたものに。美術館へ来て10年です。現在頭の中は展覧会へ向けに写真一色。モノクロームで切り取られた世界の魅力をお伝えすべく、こつこつと努力しています。(杉山)



愛媛県美術館

〒790-0007 愛媛県松山市堀之内 TEL 089-932-0010 FAX 089-932-0511 http://www.ehime-art.jp/

